

## －子育て支援活動現地調査の報告及び子育て支援への考察－

### A 現地調査の報告

秋の深まりゆく中、札幌の T 保育園と京都の O 保育園の子育て支援について現地調査をさせて頂いた。日本の北と南、子育て環境が異なる地域においてどちらの園も園長先生を中心とした職員一丸となった支援の取り組みがなされていたので、その現状について報告する。

#### 札幌市の T 保育園の子育て支援

##### 1. 実施状況

少し盛りの過ぎた紅葉と遅咲きのラベンダーが北海道らしい、小雨の肌寒い日だった。T 保育園の主催する「遊びの広場」が開催されるとの事で見学させて頂いた。

「遊びの広場」は地区センターの集会室を利用した出張保育で、この日は親子合わせて 86 名の参加で賑わっていた。市の子育て支援担当の方も参加しており、市を挙げての取り組みの姿勢が伺われた。

会場に集まってくる親子を受付け、子ども達に名札をつけてあげて誰もが呼びかける事ができるようにしたあと、支援担当のベテランの保育士さんによる手遊び、歌遊びが楽しく展開された。始めはお母さんのそばを離れなかった子たちも徐々に遊びに引き込まれ笑顔が見られるようになってきた。保育士さん手作りの遊びの小道具も心がこもっており、優しさが伝わってきた。特にグループの作り方はさすがに保育士さん、スムーズに仲間作りができ友だち意識がもてるようにとの配慮が行き届いていた。1 時間があっという間に過ぎ、最後には「たまご卵がぱちんと割れて……」の歌に合わせて遊べるような手作りのたまご（中には、いないいないばあの可愛いヒヨコさんのいる）のプレゼントがあり、どの子も嬉しそうな表情で、満足して帰っていった。

##### 2. 参加者の反応

3 名のお母さんにお話を伺った。1 人目は 3 歳のお子さんを連れていらした、引っ越しして来たばかりのお母さんで、「近くの子どもと一緒に楽しめるこんな場所があって良かった。子どもが楽しめたのでとても嬉しい」とのことだった。

2 人目のお母さんは、1 歳 4 か月のお子さんを連れており、「バギーで来られる近さで便利。子ども達も大きい子小さい子が交わる機会なのでとても良い企画だと思う。子育てでは自分の手でと思っていたが、一人だけではできないことがたくさんあり、こういう会はずっとたくさんいろんな企画でやって欲しい」と話していた。

3 人目のお母さんは、2 人のお子さんをお連れの方で「近くに広い遊び場がない。冬が早くくるので外遊びが出来なくなる。こういう機会が多くあるとよい。お金を払うサークルは遠くて行けない。広報が行き届いていたので今回参加出来た。1 時間があっという間で、

とても楽しかった」とのことだった。

### 3. 感想

顔見知り同士で来ていた子たちは始めから打ち解けてはしゃぎ回っていたが、初めてかな？と思われる子はお母さんのそばを離れずにいた。保育士さんが一人ひとりの子に細やかに気を配り、初めての子どもたちも楽しめるように無理なく誘いかけていたのが印象的だった。子育て支援の会、どんな会でもそれを企画し実践する指導の先生方の、支援の必要性を踏まえた働きかけが、参加した人達に満足感を与え「楽しかったからまた来たい」という、結果として成功に至るのだと思う。だから長年保育の現場で子どもの実態、親の心理をよく理解した指導者がこういう地域の子育て支援には是非必要な人材であることを感じ、この日担当された保育士さんたちは、きっと育児相談にも的確な対応の出来る方々なのと思った。T 保育園さんはこの遊びの広場のほかに土曜保育開放や育児サークルの支援活動、児童劇団の公演、育児講座の開催等積極的に取り組まれていた。

## 京都市の O 保育園の子育て支援

### 1. 実施状況

古都のたたずまいの奈良街道の近く、民家の軒先に大きなみかんが目に鮮やかな静かな住宅街の中にある O 保育園の「にこにこクラブ」を見学させて頂いた。

「にこにこクラブ」は未就園児のお子さんと保護者の方のクラブで、O 保育園さんが併設している児童館の先生達が遊びを企画し親子で友だちを作ることを目的とした会であり、当日は 1、2 歳児のグループで 50 人の親子が集まってアンパンマンの着ぐるみを着た児童館の先生たちと歌遊びやゲームを楽しんでいた。「にこにこクラブ」は他にもうひとつ、2、3 歳児のグループがあるとのことで、参加希望者が多いことが伺われた。関西という土地柄か、先生達のキャラクターが明るく賑やかで会を盛り上げていた。最後はクリスマスが近いのでプレゼント交換が行われ、どの子も嬉しそうだった。会場の隣には図書コーナーがあり貸し出しもしていたので、会が終わってから立ち寄って借りていく方々もあり、2 つ目の楽しみもあった。

### 2. 参加者の反応

「にぎやかな会で、子ども達も伸び伸びと楽しめ、親子でお友達も出来た。月に 2 回の開催なので、もっと回数が多ければいいな」という感想でした。また「絵本の貸し出しが楽しみで、親子で何度も利用している」という方もあった。

「保育園に入れて仕事をしたいのだけれど、こちらのように人気のある保育園はなかなか入れなくて……でも近くに住んでいるのでこういう会に時々参加させて頂き、他の子の様子を見たりお母さん達とお話ができ、子育ては大変だけれど楽しさもたくさんあるので頑張りたい」というお話も聞いた。

### 3. 感想

年齢の低いお子さんを対象の会のようなだったが、一緒に来ていたお兄ちゃんお姉ちゃんも多くいて、みんなが楽しめる内容を企画するのは難しいのではと感じたが、部分部分に両方が満足出来るメニューが盛り込まれており、さすがと思った。O 保育園さんはこの「にこにこクラブ」の他にも多彩な支援事業を行っており、園長先生が、地域の保育ニーズに自然に対応するという姿勢で取り組まれている結果と思われた。例えば「乳児の入園希望者が増えているので、今、乳児室を増築しているんですよ」といって指差した向こうに、おしゃれな可愛い保育室がもうじき完成の様子だった。京都という大都会で、地方出身者が親戚や友だちもなく子育てしている現状を鑑みる時、親子ごと受け止めてくれる頼れる保育士さんがいて子ども達を楽しませてもらえる保育園は、地域の子育て支援の中核として、これからの時代なくてはならない場所なのだった。O 保育園さんは併設の児童館を多角的に活用し、子育てサークルのリーダーの連絡会やお母さん達の趣味の会の会場提供、「にこにこ広場」のような遊びの会の定期開催の場所になっていた。また、駅ビルや公園を活用して「やんちゃフェスタ」等、様々なイベントも開催しておられるとの事だった。そして、これらのイベントの広報用のチラシがとてもユニークであった。

## B 子育て支援への考察

### 1. 広報の大切さ

知らない町へ転勤してきた時、その町での子育てに必要な情報の詰まった広報誌が、転入手続きと同時に市の窓口で渡してもらえたり、必ず行く市や町の保健センターの検診の時に、小さいお子さんを持つお母さんにくまなく渡るようにした、統一された広報の必要性を強く感じる。いろいろな保育園がそれぞれ独自の支援メニューを持って個々に広報してもなかなか行き渡らなかつたり、口コミでやって来たとか、開催日や時間がわからないけれど、とにかく来てみたという方もある。支援の保育園が連携し、子育てに必要な情報とは何か、十分に話し合う事が必要と思われる。例えば市内の小児科医の一覧とか、保育園・幼稚園一覧、子育て支援をしている保育園の支援内容を含めた一覧、市の子ども向けイベント情報、ファミリーサポーターとして登録されている方の連絡先等の一覧、また子育てワンポイントアドバイスや、子育ての楽しさを先輩ママやパパからエールを込めて書いて頂いたりとか、安心して前向きに取り組もうとする意欲のもてるような、統一された子育てガイドブックが各市町村に必ずひとつ、子育て支援の基本として必要だと思う。

### 2. 支援の場所について

保育園での子育て支援は視点を変えると、保育園内に限定する必要はない、公共の施設は、使用目的が社会的な内容であれば無料で利用出来る。T 保育園のように地区センターを利用しての出前保育的な支援活動は、保育園から遠いためになかなか参加出来ない人達にとって大変喜ばれているようであった。開催日を心待ちにしているお母さんたちも多い。

会が終わってから連れだって図書室に寄ったり、地区センターの様々なイベント情報も得ることが出来る。こういう公共の施設は増えており、建物も近代的で、空調も床材も親子遊びに優しい材質である。集まってくる人数や支援の内容によっては、中ホールとか大ホールを貸して頂けるので、有効に活用出来ると思われる。だいぶ昔になるが、研修で訪れたイギリスで、チャイルドマインダーと称する親子の集会場を見学したことがあった。広い部屋の中でお母さん達がコーヒーをすすりながら編み物をしたり、子どもの遊ぶのを横目で見ながらおしゃべりを楽しむ場所である。特別な指導者もいなかったが、子ども同士トラブルになると、誰かのお母さんが仲裁に入り解決するというゆったりとした光景であった。日本でも子育てサークルがひとり歩き出来るようになって、集まってくるお母さん達の子育て意識に共通の部分が多くなった時、当たり前のように地域のお母さん達がどの子にも同じように接する、本当の意味の地域ぐるみの子育てが実現すると思われる。そして、場所はそのために大事な役割を果たすことも認識しておかなければならない。

### 3. 支援担当者の専門性

支援を担当する保育士は、長い経験とその人格によって、地域のお母さん達から信頼され得る存在でなければならない。そしてなにより支援の目的をしっかりと認識しておく必要がある。時としてお説教しそうな気持を抑えながら、また、「こんなことくらいで悩むなんて」と情けなく思いながらも、目の前で子育てに行き詰まっている若いお母さん達の悩みを聞き、受け止め、明かりの差す方向を指し示して行かなければならない。いろいろな催しものの中では、親子の心情をくみ取りながら生き生きと楽しめる内容を企画し、実践出来るエンターティナー的な要素も兼ね備えていなければならない。さもなくば、あそこの支援は楽しくないとか個人的にでも楽しめないと、シビアな批評をする若いお母さん達もある。また、子育て経験の浅いお母さん達のなかには、他人の子と自分の子を意味なく比較し、大きい小さい、出来る出来ないで不必要に悩んだりする方もある。だからそれが内向すると別の問題に発展しかねない。そしてまた、それぞれの価値観や育児観の違いによって意味のない軋轢が生じてくる。公園に集まるお母さん達が育児サークルに発展しないのは、その場をコーディネートする第三者がいないからである。保育園での子育て支援は、そういう意味で何かあったら率直に問いかけられる専任職員がいるので、お母さん達にとって安心できる場なのだと思う。日常的な園庭開放だけでも大勢の人が集まる支援センターには、必ず人間的に魅力のある人気者の保育士が活躍している。

### 4. ニーズの的確な受け止めと今後の方向

大都市の中で、近親者もなく孤独な育児をしている若いお母さん達にどのような支援の手を差しのべたら良いのか.....いろいろな形でニーズ調査を行い、子育て中のお母さんの声を拾いながら、それに応え、積み重ねてきた結果が現在各地で展開されている支援のあり方なのだと思う。日本にとって危機的ともいわれる少子化社会のなかで、精神的に未熟

な親を力強く支援し、子どもを産み育てることの素晴らしさを実感させ、生き生きと子育てが楽しめるようにすることは、育てられる子ども達の幸せな育ち、すなわち円満な人格の形成につながっていくのだと思う。よって、日本全国で展開されている保育園による子育て支援の内容をより充実させるための専任職員の資質向上の機会や、情報交換が出来る横の繋がりも必要と思われる。同時に、すべての保育園において、おしなべて地域の子育て支援が日常保育をゆがめることなく、ゆとりを持って無理なく実践出来るように、専任職員の明確な位置づけを今後の課題とし、それが早期に実現されることを期待したい。